

袁氏と劉氏の作鏡活動

馬淵 一輝

はじめに

後漢代に製作された銅鏡には、「尚方」・「青盖」などの工房名や「袁氏」・「劉氏」などの工人名を鋳出した製品がある。筆者は前号の紀要において、上方作系獸帯鏡とそれ以外の上方銘をもつ鏡を対象に検討し、前者は「上方」を号した工房が継続的に生産し、後者は複数の工人が製作したものであると考えた。上方作系獸帯鏡と同様に、仙人を主題とする鏡として袁氏作系画像鏡が知られている。銘文冒頭が「袁氏作竟真大巧・・・」ではじまり、銘文型式・画像表現・外区紋様などにまとまりがあり、2世紀後半に徐州（華北東部）地域で作られたと考えられている。

袁氏作系画像鏡のなかには、「袁氏」以外にも「銓氏」「至氏」「田氏」などの作鏡者銘が存在し、複数の工人が協業して似たモチーフの鏡を作ったと考えられている。また、「袁氏」と同じ時期に活動した工人に「劉氏」が想定されており、神獸鏡の徐州導入に大きな役割を果たしたと考えられているが、あまり具体像はわかっていない。

そこで本稿では、「袁氏」と「劉氏」に焦点を当て、徐州地域で作られた鏡の変遷を検討し、同じ地域内でもなぜ神獸鏡の受け入れに差が現れたのか、その要因を探ることを目的とする。なお、「上方」は他地域からきた工人も加って上方作系獸帯鏡を生産した大きな工房と考えたが、「袁氏」は「銓氏」など数人の工人とともに袁氏作系画像鏡を製作した小規模の工房と想像する。もちろん、一人の工人による製品も存在し、一部の劉氏銘をもつ鏡はこれに該当すると考える。

1. 徐州の鏡作りと本稿の指針

徐州における袁氏と劉氏 銅鏡研究において徐州は、三角縁神獸鏡の銘文に「同（銅）出徐州」とあるため古くから注目されてきたが、後漢鏡の製作地として認識されるようになったのは近年になってからである。

岡村秀典は漢鏡7期⁽¹⁾（後漢後期・2世紀後半～3世紀初頭）に徐州系鏡群が成立し、ここに上方作系獸帯鏡、袁氏作系画像鏡などの鏡式が含まれることを論じた〔岡村1992・1999・2005など〕。続いて上野祥史は、神獸鏡のなかから環状乳神獸鏡ⅡC式と画紋帯同向式神獸鏡ⅠA式を、画像鏡のなかから袁氏系（円圈Ⅰ～Ⅲ式）と劉氏系（デフォルメ神獸鏡C式・デフォルメ四獸鏡BC式・同向式）を「華北東部系」と定義し、この地域で作られたと考えられる鏡の具体的な様相を明らかにした。そして、出土地から華北東部系の製作地を現在の山東省南西部～安徽省・江蘇省北部に想定し、漢鏡7期を代表する製作系統に位置づけたのである〔上野2000・2001〕。これらの研究によって徐州地域で製作された鏡の特徴が解明され、代表的な工人として「袁氏」と「劉氏」が位置づけられたのである。

徐州系の細分 森下章司は、岡村のいう徐州系、上野のいう華北東部系を「華北 - 東部系」と定義し、主に銘文の型式と出土地をもとに系統の分類をおこなった [森下 2007・2011]。

A：袁氏作系画像鏡・獸帯鏡 (Ra)、上方作系獸帯鏡 (X・Kb)、飛禽鏡 (無銘)

B：神人歌舞画像鏡 (Pb/Pd)、斜縁神獸鏡 (Pb)

C1：画紋帯同向式神獸鏡 (上野 I 式) (Sb/「天王日月」、
画紋帯環状乳神獸鏡 (上野 III C 式) (Sb/「天王日月」)

C2：斜縁神獸鏡・四獸鏡 (Sc)

銘文からは七言句の銘文 R・P をもつ A・B 系統と、四言句の銘文 S をもつ C 系統の 3 つに分けられること、出土地からは A・B 系統は山西省南西部から安徽省北部にかけて、C 系統は山東のほかその南方にも広がる傾向をもち、華北 - 東部系のなかでもさらに細分できることを示した。

また、岡村は漢鏡 5 期に淮河流域で活動していた淮派から、それぞれ「袁氏」と「劉氏」を代表とする工人グループの袁派と劉派が派生したと考えた [岡村 2017]。当初、伯牙と鍾子期を題材とする画像鏡を製作した「袁氏」は、2 世紀になると西王母・東王公と青龍・白虎からなる二神二獸鏡、瑞獸と仙人を表した鏡など、各種の画像鏡を製作したとする。また、「袁氏」と近い工人に「銓氏」や「田氏」を挙げ、袁派は出土地から淮北に工房があったと想定し、のちに斜縁神獸鏡を製作したと考える。一方、「劉氏」と近い工人に「淮南龍氏」や「蔡氏」を挙げ、劉派は淮南に工房があったと想定する。劉派は初め画像鏡や神獸鏡、のちに奈良ホケノ山古墳出土「吾作」画紋帯同向式神獸鏡を製作したと考える。袁派・劉派とも、江南の九子派や「張氏元公」の活動時期と重なる 180～190 年代に、次第に神獸鏡の生産へと転換していったと論じた。

本稿で対象とする「袁氏」は森下の A 系統・岡村の袁派、「劉氏」は森下の C 1 系統・岡村の劉派に相当する [岡村 2017、森下 2007・2011]。

問題と本稿の指針 上野の研究によって神獸鏡と画像鏡のなかから徐州系鏡群に位置づけられるものが抽出されたが、この分類に当てはまらない例が存在することも指摘されるようになった [岩本 2003、下垣 2008、村瀬 2016b など]。近年では、工人名をとりあげた漢鏡研究が進展しており、製作者や地域ごとの特徴も新たに提示されている [岡村 2017、森下 2011 など]。これら近年の研究動向を踏まえて徐州系鏡群の特徴を再整理し、その枠組みの齟齬を解消する必要にせまられている。

筆者はかつて、徐州系鏡群の一鏡式である斜縁同向式神獸鏡を対象に製作プロセスを論じ [馬淵 2015]、この過程で、工人名と図像表現の相関に着目して袁氏・劉氏・吾作 (神獸鏡系) の 3 系統の存在を指摘したことがある。製作者によって異なる銅鏡の作風は、銘文の内容や図像の表現とも相関している。また、上方工房についても上方作系獸帯鏡が楽浪郡と山東半島に集中するのに対し、上方銘をもつ神獸鏡が淮河以南にみられることを示し、徐州の北部と南部で異なる上方作鏡が製作されたことを確認している [馬淵 2023]。以上より、本稿で扱う以外の鏡式においても、徐州地域で生産された鏡には工人差や地域差にもとづく複数系統が存在していた可能性を示した。

そこで本稿では、徐州系鏡群の代表に位置づけられ、まとまりも強く型式変化を追いやすい袁氏作系画像鏡を中心に検討し、内区紋様の変化という視点から既存の変遷観を補強し、関連する工人名がどの段階に位置するか考察する。関連が深いとされる「劉氏」については劉氏銘をもつ鏡が少なく、特徴的にもまとまりを欠いていることから、まずは一人の「劉氏」によって作られ

た可能性が高い製品を明確にし、その位置づけをおこなう。これらの検討によって紋様や銘文などに神獸鏡の影響を見出す素地が整い、「袁氏」と「劉氏」がどの時期に神獸鏡を受容したか探る。

工人の個性が反映されやすい要素としては、紋様（図像）表現と、銘文の特徴句・字形が挙げられる。鏡に限らず器物の見た目は容易に模倣されることを念頭に置く必要はあるものの、紋様表現をみることによって、同名の別工人である場合や、2つの系統にまたがる工人名から地域間交流の実態が判明する可能性がある。その際には、それぞれの類型の前後関係や重複期間に注意し、同じ特徴をもった紋様・銘文を用いているかを基準に判断する。

対象とする資料 第一に、袁氏作系画像鏡および、図像表現・銘文型式が酷似し「銓氏」「田氏」や製作者のわからない一人称の「吾作」などの銘をもつ画像鏡も対象とする。鑄型の作成時に互いの製品を参照できるような近い関係であれば、特徴の共通する製品が生まれる可能性が高いためである。さらに、従来は画像鏡のみを対象とし、他鏡式の「袁氏」や、「吾作」で表現の共通する鏡に注意が払われてこなかったが、本稿ではこれらも対象とすることで、より具体的な袁氏系工人の生産活動の実態を探ることを試みる。

第二に、劉氏銘をもつ鏡を対象とする。ただし、これらの鏡はまとまりが曖昧で、数量が比較的少ないことが検討の妨げになっていた。そこで、まとまりを見出せない鏡群はひとまず置き、まずは劉氏銘をもつ鏡のなかから共通する特徴を有するものを抽出し、その作風を明らかにする。この「劉氏」の系譜を検証したうえで、劉氏銘のない「吾作」などからも同工の鏡を見出す。

2. 袁氏作系画像鏡の編年

(1) 袁氏作系画像鏡とは

袁氏作系画像鏡の特徴 「袁氏」は徐州系鏡群のなかで代表的な工房だが、画像鏡以外の鏡式は、斜縁同向式神獸鏡・獸帯鏡・方格規矩鏡などの各鏡式で2・3面程度知られているに過ぎず、もっぱら画像鏡を製作していた工人たちといえる。袁氏銘をもつほとんどの画像鏡は、図像と銘文に強い相関関係をもつことから袁氏作系画像鏡と呼ばれる [森下 2011 など]。上野による画像鏡分類の円圈式に相当する [上野 2001]。

森下によると袁氏作系画像鏡の特徴は辟邪の図像をもつこと、「有神仙有神獸」式の銘文をもつこと、「薰盧」「辟邪喜怒無央咎」の語句はこの鏡群以外にみられないこと、図像を銘文で説明しようとしていることなどが挙げられる [森下 2014]。図像は西王母と東王公などの神仙を配し、残りの区画に瑞獸や薰盧を配置し、後漢前半の画像鏡のような多様性をもたず、概して近似した図像と表現をとる。これらの銘文・図像・表現における強い共通性が、「袁氏作系画像鏡」というまとまりを形成している。

袁氏作系画像鏡の変遷観 上野は内区を円圈で区画する画像鏡を3段階に区分し、外区紋様がC字唐草紋（円圈Ⅰ式）→鋸波鋸紋（円圈Ⅱ式）→波鋸紋（円圈Ⅲ式）のように変遷したと推定する。そして、円圈Ⅰ～Ⅲ式にわたり袁氏銘が存在し、円圈Ⅰ式に「劉氏」、円圈Ⅰ・Ⅱ式に「田氏」、円圈Ⅱ・Ⅲ式に「至氏」が登場することから、「円圈系は袁氏を中心に製作されてきたが、初めの

段階では尚方や劉氏が製作に関わり、やがて両者に代わって田氏に遅れて至氏に関わるようになった」[上野 2000 p.110] と推測している。

森下は外区紋様がC字唐草紋(a類)→鋸齒紋と波紋で構成するもの(b類)のように変遷したと推定し、C字唐草紋を古く位置づける点で上野と一致する。銘文については、a類が図像を説明する内容であるのに対して、b類では獣紋を主体とする鏡でも「東王公西王母」の銘を使い続けることから、形骸化が進んでいると解釈した。また、初期の製品は「淮派の系統を引く各製作者が整理され、2世紀中ごろに徐州派が成立する」[森下 2014 p. 2]と述べ、袁氏作系画像鏡の創出に「呂氏」や「銓氏」が中心的に関わっていたと推測する。この「呂氏作」画像鏡(紹興19)の外区画像紋は呉派のものだが、内区図像や銘文をみると袁氏作系画像鏡と多くの共通点が認められることから、この鏡を呉派と淮派が結びついて現れたもので、袁氏作系画像鏡に先行すると位置づけている。

以上の見解をまとめると、外区紋様のC字唐草紋に時期差を求める点が共通しており、重要な属性となる可能性が高い。また、袁氏作系画像鏡は漢鏡6期の淮派から、呉派の影響を受けて派生したと考えられている。

(2) 図像を中心とする諸属性の分類

図像の分類 袁氏作系画像鏡は外区紋像を中心に検討されてきたが、内区図像やほかの要素も同じように変化しているのだろうか。これについて、本稿では神獣表現の分類を中心⁽⁴⁾に検討する。以下、図像の認定基準→分類の説明→時間・系統的情報→変遷の仮定の順に記述する(図1)。

西王母・東王公(神像) 山高冠の西王母と三山冠の東王公を、鈕をはさみ対置する。やや半身にして片手を掲げるか、両手を袖に隠し、両脇に侍従や仙人が控える。侍従は神像に似た服装で、やや小さく表現される。仙人は手を神像に伸ばし、肩から羽状の気が伸びる。変化の方向として追えるものは脇に控える侍従や仙人の表現であり、以下のように分類する。

神像a: 片側に侍従(王女など)をおき、もう一方に複数の仙人をおく。また、侍従や仙人の手に扇や気が表現されたり、図像の隣に「西王母」「東王公」などの傍題がおかれたりする。

神像b: 両側に仙人をおき、一方は2段になる。aと異なり侍従をおかない。

神像c: 両側に仙人をおき、片方が佇立しもう一方は跪座する。

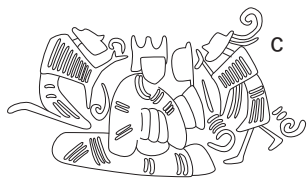
神像d: 両側に仙人をおき、ともに跪座する。

神像e: 両側に仙人をおき、ともに佇立する。

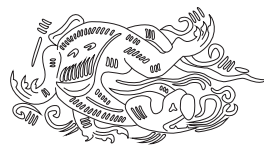
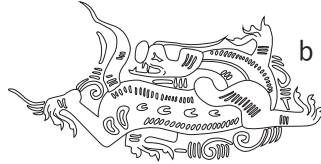
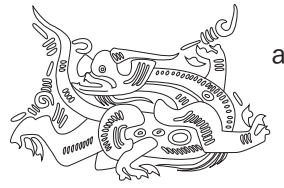
神像a～cでは侍従や仙人の描き分けをおこなうものの、神像c～eは仙人を神像の左右に1体ずつ表現するだけで省略化が進む。とくに神像eは西王母e・東王公eのように同じ型式で組み合わせることがほとんどで、定型化も進んでいる。

漢鏡5・6期に紹興付近で作られた江南系の画像鏡は、神像の隣に仙人を2・3段配することが多く、神像の肩から気が立ち上がる表現をもったものや、身体を正面に向けるものもある。これらに類似して神像や侍従を複雑に表現する神像a・bはより古相を示すだろう。神像dには扇を表現するものも存在しており、神像eより先行する可能性がある。袁氏作系画像鏡とは別系統だが、「龍氏作」画像鏡などは外区に連続三葉紋をもち、神像dと同様の図像構成をもつ。このことから神像dは別系統の影響による可能性も存在する。

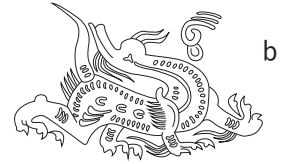
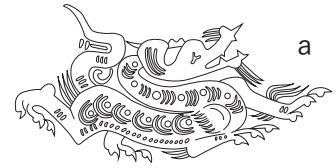
神像



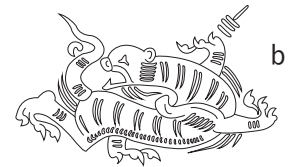
辟邪



青龍



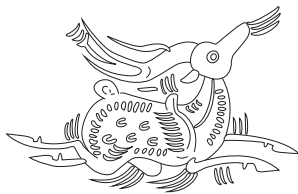
白虎



仙人



天鹿



瑞鳥



图1 袁氏作系画像鏡の図像分類

以上の検討から神像 a → 神像 b → 神像 c → 神像 d・e の様に変遷したと想定する。

辟邪 袁氏作系画像鏡は他鏡群にほとんどみられない辟邪を好んでもちいる。本来は「呂氏作」画像鏡にみるように、六本脚がある獣で、頭頂部に先端の曲がる一本角をもち、頭側部から後頭部にかけて鱗状の部位が伸び、鼻を大きく表す。袁氏作系画像鏡では脚を少なくしたものが多いが、後脚が身体に絡みつく特徴は継承されている。基本的には後ろを振り返る姿勢で描くが、身体を大きく反転させて宙を舞うものや、顎を上に向け身体を反らせたものも存在する。

辟邪 a：4本より多くの脚を表現し、後ろを振り返る。もしくは脚の付け根に鱗状の突起をもつ。
後脚が胴部にまわりつく場合が多い。

辟邪 b：4本脚で後ろを振り返る。

辟邪 c：4本脚で宙返りする。

辟邪 d：4本脚で後ろを振り返りながら、顎を上に向け仰け反る。

もともと、辟邪は多くの脚をもつ怪獣と考えられていたものの、次第にその認識が薄れ、ほかの獣像と同様に4本脚で表現されるようになったと推察する。⁽⁵⁾宙返りする辟邪 c や顎がのけぞる辟邪 d は白虎・青龍と比較すると異例であり、多様な姿勢で描くことが辟邪の特徴の一つだと考えられる。辟邪 d は身体に充填する細線が少ないなど、省略化されたものが多い。

以上の検討を踏まえて、省略化の視点から辟邪 a → 辟邪 b・c → 辟邪 d と想定する。

青龍 辟邪と同様の体躯をもつが、長い口吻から青龍と判断できる。銘文にあるように青龍と白虎は対になっており、基本的に鈕を挟んで白虎と対置するが、四獣鏡では対にならない場合が多い。

辟邪と白虎は全て後ろを振り向くように表現するが、青龍のみ前方を向くものがあり、必ず口を開く。同様の姿勢は漢代の四神の青龍に広く確認でき、この図像に由来すると考えられる。一方で、辟邪や白虎の様に後ろを振り向く青龍は口を閉じる特徴があり、袁氏作系画像鏡に青龍の図像がとりこまれるなかで口の表現が変化していったと考えられる。

青龍 a：前方を向き、口を開く。胴部の紋様まで細かく表現する。

青龍 b：後ろを振り返り、口を閉じる。

後ろを振り返る姿勢をとるものでも、口を開き細かな表現のもの（京都大学人文科学研究所蔵「銓氏作」鏡）が例外的に存在し、表現の精緻さから青龍 a に並行する古い表現と考えておく。省略化の視点から青龍 a → 青龍 b と想定する。

白虎 振り返る姿勢をとり、くび、胴、脚に縞模様をもつ。身体は側面観で表すものの、顔は斜視形と側面形に表わす。斜視形のものには両目をもち耳がつく。四肢も爪だけでなく腿まで表す場合が多い。側面形で表現したものは、顔から身体まで胴一連で表す。

白虎 a：顔が両目ともに表現され、左（右）斜め前を向く。

白虎 b：顔が片目だけ表現され、横を向く。顔と胴を一連で表し全体がC字形を呈す。

白虎 a の表現は盤龍鏡で龍と対になる虎に類似しており、盤龍鏡との関連をうかがわせる。また、一般的な画像鏡に通有する白虎表現である。一方の白虎 b は袁氏作系画像鏡以外の画像鏡に表わされることは無い。省略化の視点から白虎 a → 白虎 b と想定する。

仙人 袁氏作系画像鏡には仙人を主役にしたものが多く、銘文から王子僑や赤誦子を指しているとわかる〔森下2011〕。図像には3通りのパターンがあり、省略化という視点からは前後関係を想定できない。

- 仙人 a：向かい合う仙人の間に薰爐（博山炉）をおく。
- 仙人 b：向かい合う仙人が白と杵をもちいて、なにかを搗いている様子。
- 仙人 c：1体の仙人を表す。手から気のようなものが出ている場合もある。

仙人 a は袁氏・銓氏銘にみえる「薰爐」とともに描き、白虎と対になる存在である。仙人 b は「劉氏」や「田氏」の銘文に「撞葉草」とあることから（小校・劉氏鏡2など）、仙人が葉草を配合している様子を表すとされ、「劉氏」や「田氏」によって導入されたと考えられている〔森下2014〕。



図2 その他属性の分類

以上が各図像の分類と説明である。ほかに銘文で「白鹿」（清愛堂117）や「神鹿」（徴集館67）とされる天鹿、背や身体の正面に羽を表し、かぎ爪状の脚をもつ瑞鳥が採用される。わずかに熊や蛙に似た獣像もあるが、銘文に登場しないため断定できない。これらの図像は細分できなかったため、検討対象に含めていない。

その他属性の分類 図像のほかに、外区、乳座、鈕座の分類をおこなう（図2）。

外区はC字状の唐草紋を連続し内側に鋸歯紋をもつもの（C字唐草紋）、鋸歯紋＋複線波紋＋鋸歯紋のもの（鋸波鋸紋）、複線波紋＋鋸歯紋のもの（波鋸紋）がある。別に、画像紋やS字唐草紋がわずかに存在する。

乳座は連珠紋のもの（連珠紋）、乳座をもたないもの（無紋）がある。別に、連弧紋が少し存在し、四葉紋が1例のみある。

鈕座は連珠紋と円圏を組み合わせたもの（連珠紋）、円圏のみのもの（円圏）がある。別に、有節重弧紋が2例のみある。

いずれの属性も省略化の視点から、外区はC字唐草紋→鋸波鋸紋→波鋸紋、乳座は連珠紋・連弧紋→無紋、鈕座は連珠紋→円圏といった型式変化を想定できる。

（3）袁氏作系画像鏡の編年と工人

属性のまとめりと袁氏の分類 従来、重視されてきた外区と、今回検討した図像を中心とする諸属性がどのように対応しているか確認すると、以下のように有意なまとめりを見出すことができた。そこで、それぞれに型式を設定する（図3）（表1）。

- I 式 外区：C字唐草紋 図像：神像 a～d、辟邪 a、仙人 a
- II 式 外区：鋸波鋸紋 図像：神像 e、青龍 a
- III 式 外区：波鋸紋 図像：辟邪 c・d、青龍 b、白虎 b

I 式は神像と薰盧、II 式は定型化した神像と青龍白虎、III 式は四獣が主体になっている。神像は a→b→c→d・e、辟邪は a→b・c→d、青龍・白虎は a→b と推測したが、対応関係をみると排他的に存在するのではなく漸進的に変化しており、ある程度の重複関係をもちつつ I→II→III 式の順に変化したと想定できる (図 4)。そのほかの属性をみても I 式は鈕座: 圈帯・連珠、乳座: 連珠→II 式は鈕座: 圈帯、乳座: 連珠→III 式は鈕座: 圈帯、乳座: 無しという構成がほとんどを占める。

これまで外区や銘文をもとに前後関係が想定されてきたが、図像の省略化という視点からも矛盾はなく、変遷観の妥当性はある程度担保されよう。薰盧をもつ二神二獣鏡 (I 式)、青龍白虎をもつ二神二獣鏡 (II 式)、四獣鏡 (III 式) は、工人による作り分けや、優品 (I 式) と量産品 (III 式) の差を想定できるが、図像の省略化と対応することから、別の工人に図像が引きうつされた結果生じたと考えられる。

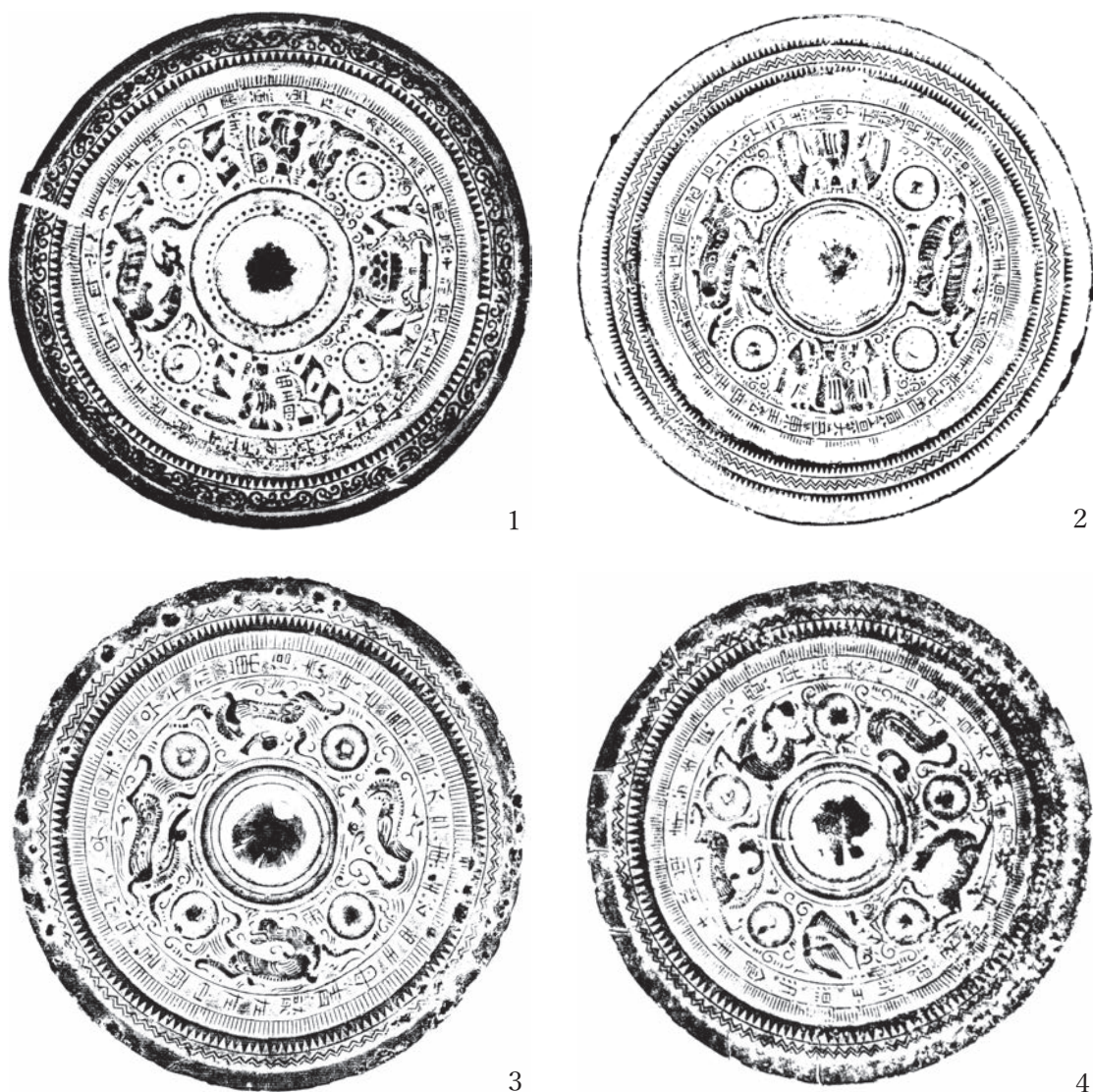


図 3 袁氏作系画像鏡の諸型式

(1: 小校袁氏 3 (I 式) 2: 中国歴史博物館旧蔵 119 (II 式)

3: 陳介祺旧蔵 125 (III 式) 4: 安徽五河金岡 6 号墓 (III 式))

表1 袁氏作系画像鏡の属性相関表

出土地など	外区			乳座		鈕座		内区画像表現						備考
	C唐草	鋸波鋸	波鋸	連珠	無	連珠	圈帯	東王	西王	仙人	辟邪	青龍	白虎	
奈良黒石山古墳	○			○		○		c/e	c		b		a	
群馬三本木古墳	○			○		○			c		a		b	東王公欠損
小校袁氏2 (陳介祺 121 ほか)	○			○		○		e	c		b・c			
小校袁氏3	○			○		○		a	b	a			a	
安徽五河金岡5号墓	○			○		○		d	c/d	a	b			銘判読不可
セントルイス美術館蔵	○			○				d	d	a	a			鈕座有節
安徽博物院蔵 75	○					○		特	c			b		乳座連弧
弥生文化博物館蔵 A12		○					○	e	e			a	a	乳座連弧
北京故宮博物院蔵		○					○	c	a		b			乳座連弧
藤井康行氏蔵		○					○			c	b	b	b	乳座連弧
三槐堂 106		○		○		○		e	e		c	a		
宜興 131		○		○		○		e	e			a	b	
中国歴史博物館旧蔵 (楊 1993-119)		○		○		○		e	e			a	a	
湖北荊門 (孔 1992-443)		○		○		○		e	e			a	a	
林裕己氏蔵 X020		○		○		○		e	e		d			
泉屋博古館蔵 M189		○			○	○				c	c		b	
ダビッド・ワイル氏蔵 (精華 93)			○	○		○					c・d		b	
安徽五河金岡6号墓			○	○		○				c	c・d		b	
高田和明氏蔵 2-79			○	○		○				c	d	b	b	
伝楽浪 (北村忠次氏旧蔵)			○	○		○				b			b	
山東鄒城峰山鎮照山荘			○	○		○				b	d		b	
山東済南女郎山 284号墓			○	○		○				b	b		b	
陳介祺 125			○	○		○					b	b	b	
徐州博物館蔵 125			○	○		○					c・d		b	
清愛堂 116			○	○		○						b	b	
五島美術館蔵			○	○		○					d		b	
小校蒙氏			○	○		○					b		b	

・後世の同型鏡と考えられるものは含めていない。

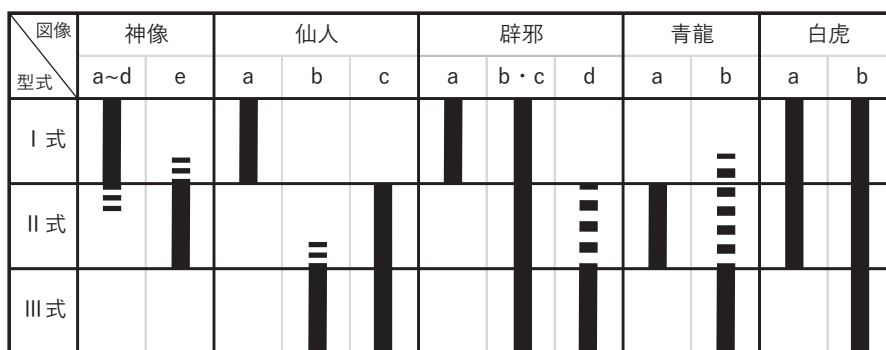


図4 画像分類消長図

袁氏作系画像鏡にみえる工人たち 「袁氏」と表現や銘文などの特徴が共通する「銓氏」「至氏」「田氏」などの工人は「袁氏」の鏡作りを間近でみられるような関係、つまり「袁氏」を代表とする工房に所属した工人だったと考えられる。それでは、これらの工人名を記した袁氏作系画像鏡はどのような製品だったのだろうか。どの型式の鏡を製作していたか見てみたい（図5）（表2）。

銓氏 「銓氏」は袁氏作系画像鏡以外に確認できず、この鏡群に特有の工人である。図像をみると仙人 a（薰廬）と辟邪 a をもつことが特筆され、辟邪本来の図像を知ったうえで作鏡していた。整った紋様の製品が多いことから袁氏作系画像鏡の創作に深くかかわったと考えられており [森下 2014]、I・II 式に相当することと矛盾しない。

銘文は「人有仙人」が多いが、第5句に「千秋萬歳」をおく点は袁氏 I 式と異なる。京都大学人文科学研究所蔵鏡や磐田渡邊コレクション・後漢 38 のように獸帯鏡に近い鏡も製作している。

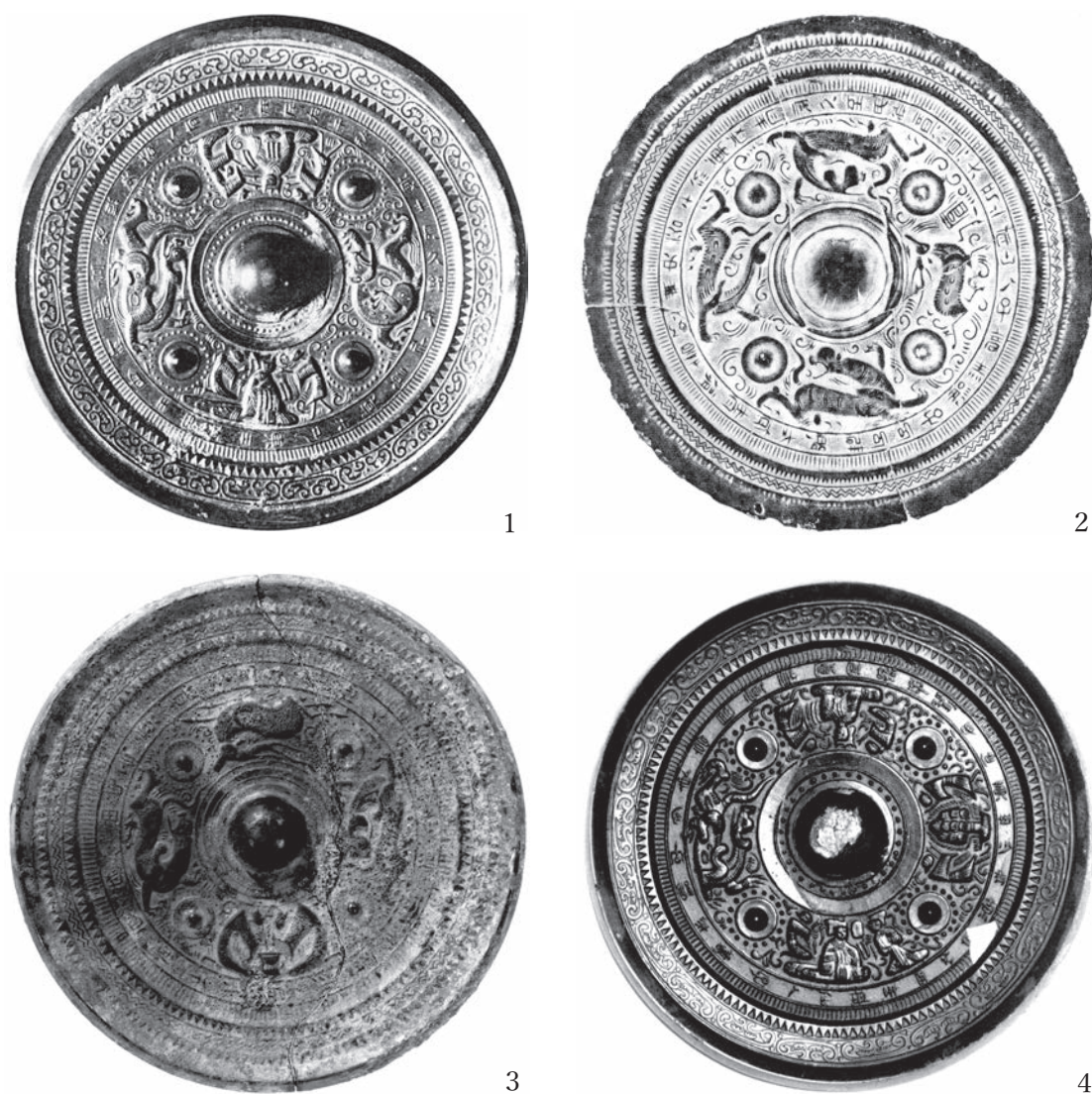


図5 「銓氏作」ほか画像鏡の諸例

(1: 薬照寺 26 (銓氏) 2: 陳介祺旧蔵 126 (至氏)

3: 静岡堂山古墳 (田氏) 4: レオン & ロジャー蔵 252 (劉氏))

至氏 「至氏」は「銓氏」の金偏が脱落した代替わりの工人とみなすこともできる。例が少ないものの、Ⅲ式に相当する後出の四獣鏡を中心に製作しており、徐州における生産の後半に位置づけられる。

神獸鏡に由来する四言句の銘文（鄂城 21）、上野分類の劉氏系に多い外区の連続三葉紋（激集館 67）など、異なる製作系統の影響を想定できる鏡も製作している。とくに、前者は上方作系獸帯鏡とみなされたこともあり [岡村 1992、実盛 2015 など]、上方作系獸帯鏡や神獸鏡との影響関係がうかがえる。⁽⁶⁾

田氏 「田氏」は江南系の画像鏡にも多くみえるが、これらとは全く異なる図像構成の製品であることから、同姓別工人の可能性が高い。Ⅱ式に相当するが、搗葉仙を題材にした鏡を複数製作していることが「袁氏」と異なる。仙人の分類でふれたように、袁氏作系画像鏡へこの図像を導入したのは「田氏」の可能性が高い [森下 2014]。

なお、兵庫西求女塚古墳から出土した「田氏作」画像鏡 [安田編 2004] は、神獸鏡に由来する図像や銘文を備えた特殊な鏡である。上野は斜縁神獸鏡や対置式神獸鏡と類似する要素が多いこ

表 2 「銓氏作」等画像鏡の属性相関表

作者	出土地など	外区			乳座		鈕座		内区図像表現						備考
		C唐草	鋸波鋸	波鋸	連珠	無	連珠	圈帯	東王	西王	仙人	辟邪	青龍	白虎	
銓氏	徐州博物館蔵 144	○			○		○		a	c	a	a			
	薬照寺 26	○			○		○		b	c		a			
	南京博物院蔵	○					○		e	c		c			乳座四葉
	山東東荘市博物館蔵		○				○		c	e		b・b			乳座連弧
	磐田渡邊 CL38		○			○	○				c	b		b	笛吹仙人
	京都大学人文科学研究所蔵		○			○		○			c		a		
	清愛堂 117		○					○			c	c・d		b	
至氏	陳介祺 126		○			○		○				c	b	b	
	激集館 67					○	○					c・c		b	外区連続三葉
	湖北鄂鋼 630 工地			○		○		○				b		b	
田氏	五島美術館蔵	○						○				b	d	b	乳座連弧
	清愛堂 120	○				○		○							図像分類不能
	福岡潜塚古墳		○					○				b	c・d	b	乳座連弧
	漢雅堂 96		○		○			○	e	e		d		b	
	弥生文化博物館蔵 A11		○		○			○	e	e		d		b	
	兵庫西求女塚古墳		○		○			○	e	e					獸像神獸
	静岡堂山古墳		○		○			○				b	d	b	
劉氏	レオン&ロジャー氏蔵	○			○		○		c	a	a	a			
	高田和明氏蔵 2-91					○	○		d	d	a	a			外区 S 字唐草
	小校劉氏 2	○				○					b	b	b	b	鈕座有節
	漢雅堂 95				○		○		e	特		c・d			外区 S 字唐草
	山東沂水柴山郷南黄家荘村				○		○		d	d			b	b	外区画像
	清愛堂 121		○				○		e	e	a	b			乳座連弧

とから3世紀前半に製作されたと考え [上野 2006]、森下は同じ田氏銘をもつ鏡のなかでも同姓別工人の所産と考えている [森下 2014]。筆者は神獸表現と配置から後述する斜縁同向式神獸鏡と同じ位置づけの製品と考える。

劉氏 劉氏銘をもつ袁氏作系画像鏡は諸属性をみるとI式に位置づけられるものの、異質な点も多い。銘文は短いものが多く、劉氏のみ「為吏高遷」の特徴句をもつ。「為吏高升」は漢鏡5期の石氏・呂氏作画像鏡、「為吏高遷」は獸首鏡、「作吏高遷車生耳」は斜縁神獸鏡の銘文にある。神像a～dや仙人aに分類した図像であっても、紋様の細かな描き込みが少なく、明らかに労力をかけていない製品が多い。外区も特殊な紋様が多く、これまでみてきた袁氏作系画像鏡とは作風が異なる。これらの要素から劉氏銘をもつ袁氏作系画像鏡は、異なる製作系統や流派の影響が強いと考える。

「劉氏」は研究史でふれたように、「袁氏」と対になる製作者に位置づけられている。現存する製品をみても様々な鏡式にみえる工人名であり、内包する問題は多い。詳細は次章でみたい。

工人の変遷 袁氏作系画像鏡はI～III式の3つに分けられ、「袁氏」は一人の工人ではなく何世代かに渡り、一世代に複数人いた可能性もある。型式変化の重複期間はある程度考えられるものの、I・II式に「銓氏」、II・III式に「至氏」、II式に「田氏」、やや特殊だがI式に「劉氏」が位置づけられ、それぞれ活動していたことがわかる。数量が少なく表現のまとまりも強い「銓氏」がI→II式へと製品を変更したとは考え難く、図像表現も緩やかに変遷することから、二つの型式の鏡を並行して製作していたと考えられる。

型式変化の重複期間を考える上で、字形の変化にも注目しておきたい。袁氏系画像鏡を字形レベルで検討した森下は、第1句「真大巧」の「真」字に注意をほらう [森下 2014]。そこで三つの型式の「真」字形を比較したところ、I式とII式の一部は上部「十」を点2つで書いたが、II式の一部とIII式では十字に切るといった変化を確認でき、これは工人名に関係なく認められることから、字形の変化に対応して製作者も世代交代したと考えられる。したがって、I→III式の前後関係は確実に認められ、II式はI・III式と重複し製作されたと考える。

(4) 袁氏系工人の作鏡活動

袁氏作系画像鏡の検討の結果に得られた変遷観は、妥当性を出土品で確かめるべきだが、出土品が乏しく検証が難しい。そこで、本稿で重視した諸属性が袁氏作系画像鏡以外のどの鏡に用いられているか検討することで、矛盾がないか確認する。最後に、関連鏡と比較することで実年代を推定する手がかりをえたい。

伯牙鼓瑟鏡の位置づけ 伯牙鼓瑟を題材にした袁氏作画像鏡は、特異な図像や小さな面径がほかと大きく異なり、残存数も3面と少ないことから前節の分析から外した (図6-1)。岡村はセリグマン旧蔵の「朱氏作」画像鏡 [Hansford1957] と比較し、「袁氏作」伯牙鼓瑟鏡を漢鏡6期に位置づける [岡村 2015]。外区にI・II式の要素であるS字唐草紋と鋸波鋸紋をもち、図像に白虎aを採用することから古く位置づけられ、本稿と矛盾はない。

銘文に「倉龍在左白虎居右」とあり、Ⅱ式になって登場する白虎と青龍の組み合わせがⅠ式で既に成立しており、袁氏作系画像鏡の「青龍白虎」の組み合わせは、伯牙鼓瑟鏡を製作した「袁氏」から始まったといえる。鈕座と乳座紋様をもたずⅢ式の要素ももつが、これは面径が小さいために略されたのだろう。

なお、浦上蒼穹堂蔵鏡は「袁氏作鏡兮世少有。倉龍在左白虎居右。白牙鼓瑟子其喙、長樂無極如後宮、長保二親。」(集釋 617A) の銘をもつ⁽⁷⁾。第1句に「兮」を挿入することや「長保二親」をもつ特徴は、乳座に連弧紋をもつⅡ式(五島美術館蔵鏡・弥生博物館蔵 A12 鏡など)⁽⁸⁾と共通し、字形も酷似することから同一工人による製品と考えられる。

袁氏にみられる神獸鏡の受容 早稲田大学考古学研究室蔵斜縁同向式神獸鏡 [車崎 2005] (図 6-2) はⅢ式の要素である外区波鋸紋をもつ。一方で、銘文は「袁氏作鏡真大巧。上有東王父西王母。青龍在左白虎居右。辟邪喜怒無央咎。仙人王高赤容子。千秋萬世生長。」(集釋 702) とあり、「千秋萬世」とするのはⅠ・Ⅱ式の伯牙鼓瑟鏡や小校劉氏鏡 2 に限られる。仙人は表さないものの、Ⅱ式の神像 e とよく似た図像を採用するなど、外区以外の要素はⅠ・Ⅱ式に相当することを示している。これはもともと斜縁同向式神獸鏡の外区のほとんどが波鋸紋であることから、むしろⅢ式への波鋸紋の採用が斜縁同向式神獸鏡や別の画像鏡に由来するとみるのが適当であろう。

また、袁氏作系画像鏡と同様の図像表現と「吾作」で四言句の銘文 S をもつ四獸画像鏡が楽浪から 2 面出土している。内区に白虎 b と天鹿を、外区に波鋸紋と連続三葉紋をもつことから、Ⅲ式の袁氏作系画像鏡に銘文 S が受容されたことがわかる⁽⁹⁾。

したがって、袁氏系工人が生産の後半段階(Ⅲ式相当)に神獸鏡の要素を取り入れたと考えられる⁽¹⁰⁾。

実年代の上限と下限 袁氏作系画像鏡の上限については、「永元三年(91)石氏作」画像鏡(今照 141)と「呂氏作」画像鏡(紹興 19)が年代の指標となる(図 7-1)。「石氏作」画像鏡は神像



図6 伯牙鼓瑟画像鏡と斜縁同向式神獸鏡(1:千鏡堂 163 2:早稲田大学考古学研究室蔵)

aと白虎aを、銘文は「喜怒毋央咎」「千秋萬歲生長久」をもち、「袁氏」らとかかわりが深い。ただし、神像の細部やそのほかの図像を比較すると、「永元三年石氏作鏡」の方に江南系画像鏡の影響が色濃く、図像も精緻で古相の印象を受ける。実際に「石氏作」盤龍鏡の最新段階には、袁氏作系画像鏡でみたような辟邪が採用されている〔岡村 2012〕。また、近い表現の辟邪を配する「呂氏作」画像鏡（紹興 19）は、袁氏作系画像鏡に先行し〔森下 2014〕、「呂氏」という工人自体も漢鏡 6 期に位置づけられている〔岡村 2010〕。したがって、I 式の始まりを漢鏡 6 期後半（2 世紀前半のいずれか）に相当するものとしておく。

下限について、「袁氏」「至氏」はⅢ式に神獸鏡の諸要素を受容し、独自の作鏡活動を終えたとみることができる。はじめ、斜縁同向式神獸鏡や部分的に神獸鏡の要素をもつ鏡を作ったが、次第に、袁氏作系画像鏡の図像表現で四言句を含む四獸鏡（図 7-2）の製作へ転じ、最後には神獸鏡の製作者集団に組み込まれたとみられる。徐州における神獸鏡の伝播は 2 世紀後半と考えられるため〔岡村 2012 など〕、袁氏作系画像鏡が製作されなくなる時期は漢鏡 7 期後半（2 世紀後葉・180 年前後か）と想定できる。

袁氏工房の生産動向 袁氏作系画像鏡はまとまりが非常に強く、何らかの規範やルールの下で作鏡活動をおこなっていたと推測され、その中心には「袁氏」が存在していた。しかしながら、主紋様の辟邪は「銓氏」、搗葉仙は「田氏」と「劉氏」、四獸は「至氏」と密接なつながりがあり、袁氏作系画像鏡は「袁氏」とこれらの工人が所属した工房で製作されたと推測する。「石氏」「呂氏」ら淮派の工人から派生した「銓氏」「袁氏」によって神像・薰盧・辟邪を中心とした袁氏作系画像鏡が創作され、のちに神像・青龍・白虎を中心にした鏡へと主力が移り変わる。四川由来の神獸鏡が徐州へ東伝すると、最終的に神像が脱落した四獸鏡を作るようになり、「袁氏」たちは神獸鏡生産の波にのまれていく。



図7 年代の上限と下限を示す資料（1：今照 141 2：楽浪郡 1321）

3. 劉氏銘をもつ鏡

(1) 「劉氏」をめぐる諸問題

「劉氏」の研究史 「袁氏」らは画像鏡を中心に製作した徐州系鏡群の中核をなす工房であり、鏡群のまとまりも明確である。対して劉氏銘は画像鏡のみならず、多種多様な鏡式に確認でき、まとまりを見出し難い。すでにみたように、I式には劉氏銘をもった鏡が存在するが、異なる製作系統や流派の影響が強く見受けられた。

上野も「袁氏」の活動開始時期（円圈I式）から「劉氏」が存在していたことを指摘しているが、一方で、冒頭の研究史で述べた通り、画像鏡のなかに別に劉氏系を設定し、製作開始時期を円圈III式相当とすることから、時間的断絶が認められる。「中国古鏡の研究」班の集釋を参照すると、「劉氏作」盤龍鏡・画像鏡は集釋613・727に、「劉氏作」神獸鏡は集釋734B・738にあるように、劉氏銘をもつ鏡は漢鏡6～7期にわたり存在していたことがわかる。岡村は久保惣記念美術館蔵鏡（久保惣59）と大和天神山古墳出土鏡〔伊達ほか編1963〕を漢鏡7期に位置づける〔岡村2017〕。別に、斜縁神獸鏡と劉氏銘をもつ鏡の類似性が指摘されている〔村松2006〕。

以上の様に、劉氏銘の袁氏作系画像鏡や盤龍鏡が漢鏡6期に位置づけられる一方、「劉氏作」神獸鏡は漢鏡7期のなかでも時期的に降るとされる斜縁神獸鏡との類似性が指摘されている。漢鏡6期～7期後半の様々な鏡にみられる劉氏銘であるが、時期や鏡式をまたぎ比較が難しいためか、「劉氏」に関する研究はほとんどない。そこで、本節では「袁氏」との相違点である神獸鏡との関係性を探り、「劉氏作」神獸鏡にアプローチしてみたい。

画像鏡と盤龍鏡の「劉氏」 神獸鏡を検討する前に、「劉氏作」画像鏡・盤龍鏡を概観してみたが、外区に連続三葉紋・画像紋をもつ画像鏡が多いことや、「三羊作」画像鏡と類似する製品が存在する程度で、有意なまとまりは見いだせなかった。⁽¹¹⁾ 地域的な特徴としては、淮派に由来する外区五銖錢紋と双魚・九尾狐・三足鳥などの画像紋が確認できる。銘文をみると「明而日月」など徐州系に近い語句が散見され、⁽¹²⁾ 「寿如金石」など華西系の影響を想定できる語句も確認できる（図8）。



図8 「劉氏作」盤龍鏡・画像鏡の諸例（1：巖窟2下55 2：大阪大谷大学博物館蔵）

「劉氏」銘をもつ鏡の共通性は少なく、異なる「劉」の字形が多く存在しており、一人の「劉氏」による製品とは到底考えられない。上野の画像鏡の分類に当てはまらない鏡に劉氏銘が多いことを岩本が指摘するように [岩本 2003]、考古学的に分類不能な製品が多い。後漢後半の淮派や徐州系という枠組みにはおさまるものの、複数の工人が劉氏銘をもつ鏡を作っていたと想定され、ここでとりあげる「劉氏」もその一つと考える。⁽¹³⁾

(2) 劉氏作系神獸鏡の系譜と特徴

神獸鏡の「劉氏」⁽¹⁴⁾ 「中国古鏡の研究」班や岡村が重視するように奈良天神山古墳出土画像鏡⁽¹⁴⁾と和泉市久保惣記念美術館蔵銘文帯神獸鏡の2面(図9)は、「劉氏作明鏡」が共通するだけでなく、「服者」「善同出丹陽」などの特徴的な銘文まで一致する。「劉」の字形だけでなく「氏」「敬奉賢良」などの字形まで一致しており、一人の工人によって製作された可能性が高い。異なる鏡式のため図像表現の比較は難しいが、鏡式をまたいで製作者を推定できる貴重な例といえるだろう。

したがって、本稿ではこの2面を「丹陽劉氏」と仮称し、特徴が共通するほかの鏡と紐づけることで、この工人がどのような特徴をもつ鏡を作っていたのか、どういった神獸鏡から影響を受けたのかを考察する。



図9 和泉市久保惣記念美術館蔵 59 鏡(1)と奈良天神山古墳出土鏡(2)

①変形雲龍紋からみた華西と劉氏の関係

陳介祺 160 鏡は「吾作」だが先の 2 面の「劉氏」とほぼ同銘をもち（集釋 738 注）、外区の唐草紋のような紋様は陳介祺 163「劉氏作」環状乳神獸鏡にもみえる。画紋帯・銘文帯神獸鏡には稀有な紋様であり、そのルーツは華西系の変形雲龍紋に求められる。

変形雲龍紋の変遷 変形雲龍紋は方銘獸帯鏡や三段式神仙鏡など華西系鏡群を代表とする鏡式の外区紋様に採用され、ほかの鏡式にはあまり例がない。龍の表現が、著しく形骸化したもので〔森下 2012〕、U 字状の頭部と「つ」形の尾部を表し、体軀にコブ状の節やクローバーの葉のような装飾がつく。そのほかの鏡式にほどこされる変形雲龍紋と類似する紋様は、管見におよぶ範囲では以下の例がある（図 10）。

画紋帯同向式神獸鏡 画紋帯同向式神獸鏡の外区に雲龍紋を採用しているものはグラハム・コレクション 55（Dewar, Susan 1994）（「吾作」画紋帯同向式神獸鏡）・劉東氏藏（今照 121）（「九子作」画紋帯同向式神獸鏡）に限られる。「幽凍金剛（商）」の特徴句が共通し、内区下段の通常は黄帝をおく位置に蚩尤とみられる怪獣を配置するなど、紋様構成でも酷似している（集釋 742B）。今照 121 鏡は「四氣像元 六合設長」などの特徴句をもつ。これらの鏡は九子派の製品と考えられ〔岡村 2023〕、「九子」が四川から江南へ移っていく過程のいずれかの段階において製作されたものとみてよいだろう。

環状乳神獸鏡・銘文帯四獸鏡 陳介祺 160・163 の外区は、この変形雲龍紋の省略型と考えられる。頭部と尾部がなく、体軀も細くなり、クローバー状の紋様やチェックマークのような紋様が主体となる。節をもたないため、唐草紋のようにもみえるが、頭部と尾部の消失から、龍を表現しようとしていた本来の意図を汲みとれずに変形してしまっているのであろう。

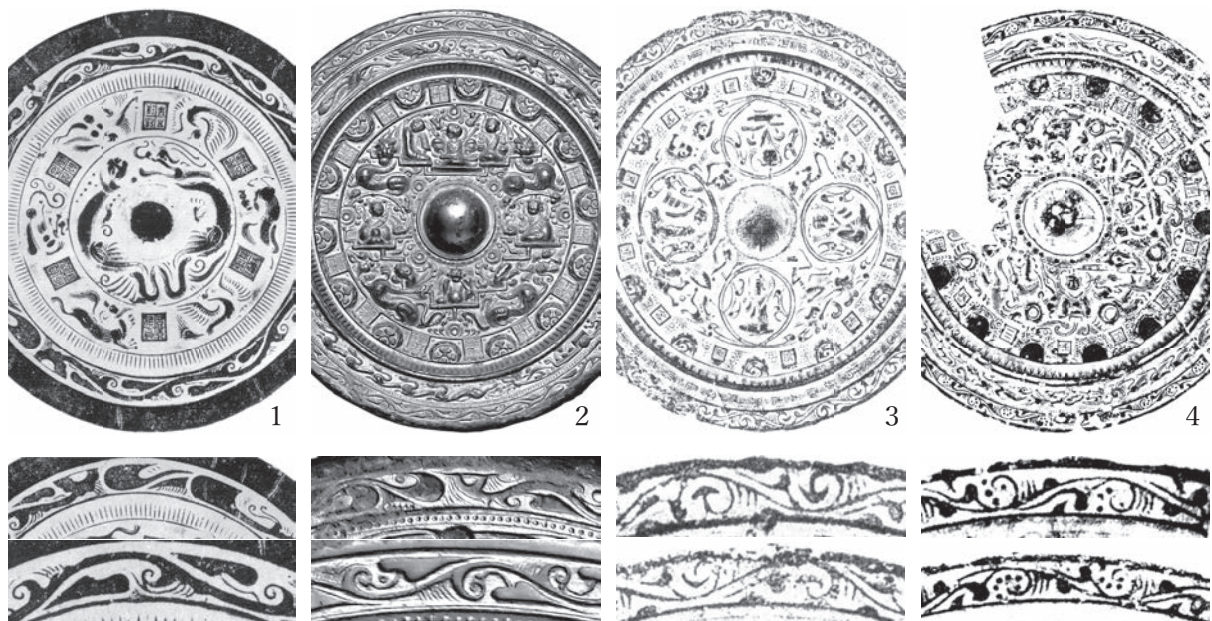


図 10 変形雲龍紋の変遷と関連鏡

(1: 古鏡 100 2: グラハム CL55 3: 陳介祺旧蔵 160 4: 陳介祺旧蔵 163)

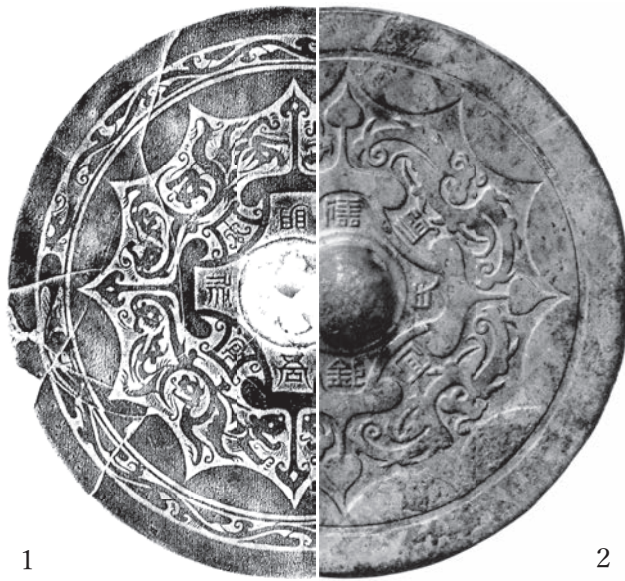


図11 糸巻鈕座をもつ「劉氏作」・「吾作」鏡
(1: 巖窟2上101 2: 楽浪貞柏里24号墳)

この紋様は、先にふれた陳介祺 163「劉氏作」環状乳神獸鏡、陳介祺 160「吾作」銘文帯四獸鏡のほか、福岡祇園山1号甕棺出土「吾作」銘文帯四獸鏡にみられる。これも半円方形帯に「善同出丹□・・・」の銘文をもち、同じ「劉氏」によって作られた可能性が高い。また、伝楽浪梧野里出土東京国立博物館蔵の「吾作」環状乳神獸鏡(TJ-4335)にも確認できる。

華西系の影響 通常、画紋帯・銘文帯神獸鏡・四獸鏡に変形雲龍紋は採用されないが、なぜ採用されたのか。その形成要因を考えると、⁽¹⁵⁾「九子」と「劉氏」の繋がりを想定できる。

森下は三段式神仙鏡を a～c 類の 3 つに分け、年代については廣漢系の紀年鏡や墓葬資料から a 類を 2 世紀中葉、b 類を 2 世紀後半とし、そして 3 世紀末には終末を迎え、「九子」は b 類で作鏡者に現れたと考える [森下 2012]。四川から江南へ「九子」自体移転したか、製品のみ流通したかは諸説あるが [岡村 2023]、のちの「九子」の製品は長江中下流域から出土する。したがって、江南に近い徐州系の「劉氏」が、変形雲龍紋をもつ九子派の画紋帯同向式神獸鏡を模倣し、画紋帯環状乳神獸鏡や銘文帯四獸鏡に採用したとすれば、製作時期は「九子」が活動した 2 世紀後半以降を想定できる。

糸巻形鈕座をもつ鏡 また、この雲龍紋は楽浪貞柏里 24 号墳出土変形獸紋鏡の外区にも確認することができる (図 11)。平彫表現の鏡で、糸巻形鈕座の間に「吾作明竟、長亘子孫。」の銘文をもち、獸を 3 体配置した類例の少ない鏡である。糸巻形鈕座はふつう八鳳鏡にほどこされるが、本鏡は八鳳紋が獸紋に置き換わっている。鈕座の形状・平彫表現・獸紋様といった要素から、獸首鏡や八鳳鏡から発生したものと想定できる。関連する鏡として、巖窟 2 上・33 に掲載される「劉氏鉅文、長亘子孫。」の銘をもつ変形八鳳鏡は、貞柏里 24 号墳出土鏡によく似た鈕座をもつ。獸首鏡と八鳳鏡も四川由来の鏡であり、「劉氏」が華西から影響を受けた可能性を補強する資料といえる。

②劉氏作神獸鏡の特徴 図像表現と銘文型式・特徴句

西王母の表現 先に検討した変形雲龍紋やその省略型をもつ鏡どうしは、神像の表現にも類似性が確認できる (図 12)。多くの神獸鏡の西王母は玉勝付の双卷冠が一般的である。森下のいう九子の三段式神仙鏡や対置式神獸鏡の西王母は、頭頂が膨らみ髪際の表現がされたヘルメットのような帽子をかぶる特徴をもつ。この表現は劉氏の神獸鏡にも認められ、とくに久保惣 59 鏡は額の位置に白毫のような膨らみをもち、三段式神仙鏡と共通している⁽¹⁶⁾。

よく似た西王母像を探すと、楽浪梧野里 19 号墳出土画紋帯神獸鏡 [梅原・藤田 1959] と、千葉高部 30 号墳出土鏡 [西原 2004] が挙げられる。前者は久保惣 59 鏡に最も近似し、後でふれる銘

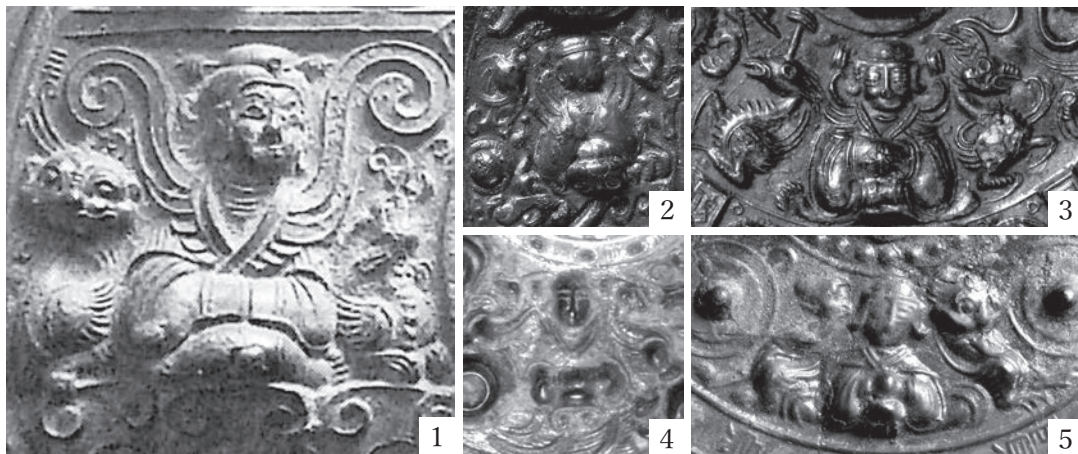


図12 西王母の比較

(1: 四川綿陽何家山1号墓 2: 京都久津川車塚古墳
3: 鄂鋼西山鉄鉞(鄂城 97) 4: 久保惣 59 5: 千葉高部 30 号墳)

文の特徴も類似する。後者の画像鏡は西王母のすぐ脇に龍虎座が表現されるために玉勝は省略されているが、別区画に表された青龍・白虎の表現もよく似ており、久保惣 59 鏡と細部まで一致している。作鏡者銘を欠くが、「好潔無疆⁽¹⁷⁾」「服者 賢奉敬良」などの銘をもつ。これらの2面は「劉氏作」神獸鏡と多くの特徴が一致することから、久保惣 59 鏡に始まる丹陽劉氏の作品である可能性が高い。

そのほかにも、京都久津川車塚古墳出土「吾作」画紋帯同向式神獸鏡(泉屋 M109)、鄂鋼西山鉄鉞出土画紋帯神獸鏡(鄂城 97)にも同様の西王母表現がみられる。前者は先ほどのグラハム鏡だけではなく、奈良ホケノ山古墳出土鏡との関連も指摘される(集釋 740 注)。後者は半円方形帯外周に菱雲紋をもつ特殊な鏡で、奈良久度 3 号墳出土鏡・大阪和泉黄金塚古墳出土鏡と同型鏡であり注目されている[村瀬 2016a]。

劉氏銘をもつ鏡の類例はまだまだ少ないが、鏡の系譜や日本の出土遺跡をふまえると重要なものが多い。「服者」などの特徴句、省略型変形雲龍紋、頭頂が膨らみ玉勝を戴く西王母などの特徴をもち、背後には華西系の存在を想定できる。変形雲龍紋だけでなく、神像表現からも「劉氏」と華西系の関係性を補強できるだろう。

南北の四言句 次に銘文を比較することで、「劉氏」の銘文がいずれの地域・工人と関係をもつか検討する。神獸鏡は4区画に分けた方格に銘文をもつことが多く、四言句の銘文Sとした樋口隆康の分類[樋口 1953]をもとに検討が進んでいる。神獸鏡の製作地を考える手がかりとして銘文に着目した上野は、四言句を銘文Aに細分し[上野 2000]、さらに画像鏡の検討で分類を修正した[上野 2001]。本論と関係するものを挙げると(上野 2000/2001)、

上野 A2/S2 吾作明竟 幽涑三商 配像萬疆……。 「幽涑三商」の後を「配像萬疆」が受ける。「天王日月」「明而日月」などの語句を含むもの。「敬奉賢良」「衆事主陽」が特徴句となる。

上野 A3/S3 吾作明竟 幽涑三商 周刻典祀……。 「幽涑三商」の後を「周刻典祀」が受ける。「衆神見容」「天禽並存」もしくは「四気像元」「六合設張」などが特徴句となる。

上野はこの銘文とそのほかの属性との組み合わせから型式を設定した。そして、これらの銘文をもった鏡の出土地に偏りがあることから、銘文 A2/S2 を華北東部系、A3/S3 を錢塘江系に位置づけている。

林裕己は銘文を悉皆的に検討し、上野 A3 を特徴句の差異からさらに細分し、そのうち林 Sd 「吾作明竟、幽涑三商、周刻萬疆、四氣像元、六合設長、擧方乘員、通距虛空、統德序道、祇靈是興、伯牙除樂、衆神見容、其師命長。」の「四氣像元」「六合設長」などほかの銘文 S にはない特殊な語句を含むものは、出土地から江南でやや遅れて出現したと推測する [林 2006]。

劉氏の銘文の系譜 これらの研究を整理すると、上野や林により江南系の銘文の具体像が明らかになったことは重要であろう⁽¹⁸⁾。実際の銘文を提示し、劉氏の銘文の特徴や、こういった地域に位置づけられるかみてみたい。

外区：「劉氏作明竟、幽涑三商。調刻無祉、配像萬疆。天禽四守、銜持維剛。大吉、其師命長。服者、敬奉賢良。曾年益寿、富貴。」

内区：「漢有善同出丹陽。大師得同。合涑五金成。」

(久保惣 59・銘帯二神二獸鏡・集釋 738)

劉氏銘の特徴は「劉氏作明鏡、幽涑三商。調刻無祉、配像萬疆。天禽四守、銜持維剛。」を基本にして「大吉」「服者」などの二字句が挿入され、別に「善同出丹陽」などの特徴句を備える。江南系の語順と「天禽四守」「銜持維剛」の特徴句をもつが、徐州系の「敬奉賢良」もみえる。「劉氏」自体は徐州系の工人と考えられているが、銘文には徐州・江南両系統の影響が認められる。

また、久保惣 59 鏡のように外区に銘帯をもつ神獸鏡は、廣漢派の神獸鏡や建安年間 (196 ~ 220) に江南で盛行した重列式神獸鏡に多く、両地域の系譜をひく [上野 2007]。

劉氏銘の動向 まとめると、漢鏡 6・7 期に劉氏銘をもつ鏡が作られるが、淮派・徐州系に含まれること以外、あまり共通性は認められず、これらは複数の工人の製品が混在していると考えられる。そこで神獸鏡の影響がみえる丹陽劉氏を起点にすると、変形雲龍紋と西王母の表現をめぐって華西系の「九子」との近い関係がみえ、銘文では徐州・江南両系統の特徴を備えることがわかった。

「劉氏」は「袁氏」と同じ徐州系の工人であるが、華西地域や神獸鏡の影響を強く受けており、異なる製作系統に位置づけられる。また、袁氏作系画像鏡と比較すると劉氏銘をもつ鏡は後出する要素が多く、その活動時期は「袁氏」に比べるとやや遅れる可能性もある。I 式にみた劉氏銘画像鏡の異質さはこれらの事情に起因すると考える。

4. 袁氏と劉氏の鏡作り

以上、徐州地域における後漢鏡の系譜と製作工人について、「袁氏」と「劉氏」を中心にみてきた。「袁氏」は画像鏡を中心に凶像や銘文にまとまりの強い鏡群を形成した。3 型式に分けられることから 2・3 世代にわたる作鏡工房で、「銓氏」・「田氏」・「至氏」などの工人がそれぞれの世代で袁氏工房に所属したと考えられる。一方、漢鏡 6・7 期に「劉氏」銘をもつ鏡が作られるが、これ

らは一人の工人とは考えられない。そのうち一人の「劉氏」（丹陽劉氏）が華西系の影響を受けて神獸鏡の製作を始める。「袁氏」がほとんど神獸鏡の諸要素を受容しようとしなかったのとは対照的であり、同じ徐州系の工人でも作鏡姿勢は異なる。

最後に、「袁氏」と「劉氏」の作鏡動向を通時的にみることでまとめたい。

漢鏡6期後半、「袁氏」は伯牙鼓瑟鏡や袁氏作系画像鏡I式を製作しており、「銓氏」も薰廬と辟邪をあしらった鏡を製作していた。「劉氏」は盤龍鏡や外区に連続三葉紋をもつ画像鏡を製作していた。

漢鏡7期になると、「袁氏」は東王父・西王母と青龍・白虎、仙人を中心とした袁氏作系画像鏡II式の製作に転じ、「田氏」は搗葉仙をもつ鏡を製作していた。斜縁同向式神獸鏡は「袁氏」がこのときに製作したと考えられる。丹陽劉氏による神獸鏡製作の開始は、袁氏・劉氏ともに生産体制が大きく変換した画期に相当する。

漢鏡7期後半になると、「袁氏」は神仙が脱落した袁氏作系画像鏡III式の製作に移り、「至氏」も同じ四獣鏡を製作していた。丹陽劉氏の神獸鏡はこの時期に位置づけられる可能性もある。この頃になると、両工人とも工人名ではなく「吾作」を名乗り始め、やがて神獸鏡生産のなかに埋没していく。

「袁氏」は2世紀から180年代前後に、神獸鏡を製作した「丹陽劉氏」は180年前後に、それぞれ徐州の北と南で活動していたと推測する。

両工人とも淮派から出発し、「袁氏」は従来とは異なる画像鏡の製作に傾倒し、徐州地域を代表する工人にまで成長した。しかしながら、神獸鏡の存在を関知しつつもそれを製作した鏡に反映させることはしなかった。一方の「丹陽劉氏」は、神獸鏡のなかでも自身の個性を備えた製品を製作し始める。さらに徐州全体へ神獸鏡を拡散させ、最終的には両工人とも「吾作」銘を採用した鏡を製作するようになり、多くの工人のなかへ埋没していった。

おわりに

本稿では袁氏作系画像鏡の成立や「劉氏」による神獸鏡の導入など、漢鏡7期に徐州における作鏡動向が大きく変容したことを示した。前半では袁氏作系画像鏡を3型式に分けて、主紋様が東王公・西王母の組み合わせから獣像に統一される変遷観を示し、「袁氏」以外の工人をそれぞれの型式に位置づけた。後半では劉氏銘をもつ盤龍鏡・画像鏡の特徴にふれつつ、外区紋様・西王母・銘文などの「劉氏」の神獸鏡の特徴を明らかにし、西方からの影響を指摘した。

研究史では「袁氏」「劉氏」と関連する鏡に画紋帯同向式神獸鏡と斜縁神獸鏡が挙げられているが、本稿ではあまり追及できなかった。両工人が神獸鏡を受け入れたのちの展開にかかわり、筆者のこれまでの研究とも関連するため、今後も検討を続けていきたい。

なお、「劉氏」で検討した神獸鏡と関連する鏡が日本列島から複数出土している点は興味深い。上野は華北東部系の神獸鏡が列島から多く出土することを指摘しており、ほとんどの鏡は吾作銘のため作鏡者の同定は難しいが、「劉氏」の系譜をひく神獸鏡が多いことを推測できる。また、かつて筆者が見出した画紋帯神獸鏡の一工人は[馬淵2019a・b]、劉氏と異なる特徴を備えており、別系統が存在すると考えられる。これらの鏡は少なからず日本の古墳からも出土しており、袁氏

作系画像鏡は紋様が三角縁神獸鏡へと繋がることが指摘され、日本から出土する画紋帯神獸鏡は劉氏に系譜が連なると考えられている。また、これら徐州系の鏡は楽浪郡故地と日本列島から多く出土し、畿内に集中することから、三角縁神獸鏡成立以前に卑弥呼を盟主とする邪馬台国が公孫氏を通じて独占的に鏡を入手していたと考えられるなど、古代日中関係史を知る上でも重要なテーマといえる。

注

- (1) 漢鏡編年の主な時期と鏡式は以下の通り。本稿とかかわるものに限定した。

漢鏡 5 期（後漢前期、1 世紀中頃～後半）：画像鏡・盤龍鏡
漢鏡 6 期（後漢中期、2 世紀前半）：画像鏡・小型の盤龍鏡
漢鏡 7 期（後漢後期、2 世紀後半～3 世紀初め）：前半：上方作系獸帶鏡・袁氏作系画像鏡など画像鏡の一部、
後半：画紋帶神獸鏡・斜縁神獸鏡など
- (2) 本稿では徐州系に呼称を統一する。
- (3) 本稿で使用した林分類を示す [林 2006]。

Kb：尚方作竟真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食糞 浮由天下放三下海 徘徊名山採芝草 寿如金石之天保。
Pb：尚方作竟自有紀 辟（除）去不羊宜古市 上有東王父西王母 令君陽遂多孫子（令人長命不知老）。
Ra：某氏作竟真大巧、上有東王父西王母、山人子高赤容子、・・・
Sb：吾作明竟、幽涑三商、配像万疆、統德序道、敬奉賢良、周刻無祉、伯牙奏樂、衆事主陽、福祿正明、富貴安樂、
子孫番昌、賢者高顯、仕至公卿、其師命長。
Sc：吾作明竟、幽涑三商、統德序道、配像万疆、曾年益寿、子孫番昌（宜孫子）。
X：上方乍竟真大工 青龍白虎在左右 宜子孫。
- (4) 本来は型式ごとにさらに細分することが望ましく、本稿の分類は正確にいうと図像の姿勢の分類といえるだろうが、図像分類の研究史にならぬここでは表現の分類と呼称しておく [田中 1983、岸本 1989、岩本 2020 など]。
- (5) 銘文には「青龍在左白虎居右」の句があるにもかかわらず、図像には白虎と対で辟邪 b・c が表現されているものが存在する。青龍・辟邪とも空想の生き物のために混乱が発生したと考えられる。
- (6) ほかに至氏銘の鏡を探すと上方作系獸帶鏡に含まれる製品が多い。ただし、オークション資料がほとんどであるため参考に留めておきたい。また、早稲田大学會津八一記念美術館蔵服部 CL37 環状乳四神四獸鏡 [持田編 2008] も「至氏作竟」の銘文をもつが、そのほかの銘文は文章を成していない箇所が多く、偶然に挿入された可能性もある。
- (7) 本稿で用いる集釋は「中国古鏡の研究」班 2011a・b・2012・2013 にしたがう。
- (8) 外区や図像は II 式の特徴を備えるが、銘文は「袁氏」I 式と「銓氏」に近い特徴をもつため、II 式のなかでも古く位置づけられる可能性をもつ一群としてまとめられる。
- (9) この 2 面はかつて上方作系獸帶鏡にも位置づけられた鏡であるが [岡村 1992、実盛 2015 など]、表現から袁氏作系画像鏡に含めた。先に検討した四言句をもつ「至氏作」四獸鏡（鄂城 21）もこの 2 面と同じ脈絡の製品だろう。
- (10) 袁氏銘の神獸鏡は小校に 1 面収録されている。特殊な鏡、拓本が不鮮明、現状で 1 面しか確認できないことから、検討対象に含めていない。
- (11) 三羊は「青羊」などと同様に工房名と考えられている [岡村 2011]。漢鏡 5 期末に青蓋から独立し、漢鏡 6 期には「三羊宋氏」のように、工房に淮派の工人を組み込んでいた。ただし、建寧二年（169）三羊作獸首鏡 [紀年鏡図説・漢 18] も存在し、遅くとも漢鏡 6 期のうちに四川へ工房を移し、漢鏡 7 期には廣漢派の工房として再出発していたようである。現状では淮派の「三羊」と漢鏡 7 期の廣漢派の「三羊」が存在する。
- (12) 「明如日月」は徐州系の（集釋 729）、「生如金石」は華西系の特徴句とされている。
- (13) 五島美術館蔵鏡は「劉氏作竟真大巧、上有天守四首轉、連相隨千歲、蝦蟇立相豎王喬赤誦子兮。」の銘をもつ。銘文の「千歲」や「王喬赤誦子」、図像の白虎と天鹿など袁氏作系画像鏡との関連をうかがえる。
- (14) 図像も特殊で、仙人と蟾蜍が龍虎に騎乗し、残りの区画に搗葉仙や対面する神像を置く騎仙龍虎画像鏡で四言句の銘文 Sb と七言句の銘文 Ra をもつ鏡群が存在する。四言句の場合第 2 句を「幽涑三岡」とし、斜縁神獸鏡とかかわ

りが深いと考えるが〔馬淵 2022〕、今後の課題としたい。

- (15) ケルン東洋美術館蔵（精華 95 上）は「劉氏竟與衆異、大吉利宜侯王。買能常服者、子孫番昌。師命長。」（集釋 727）の銘をもつ。図像は四獣で構成されるが同定が難しい。「與衆異」は漢鏡 5 期にはじまるが、「九子竟與衆異、服者命長。」（集釋 呉 02）のように「九子」対置式神獸鏡にも類例がある。そのほか「大吉利」や「宜侯王」など紀年鏡に単独で置かれる場合が多い。
- (16) 頭頂部の膨らみは「示氏作」重列神獸鏡にも認められるが、この種の鏡では西王母に限らず全ての神像が同様の表現をとることが多く、玉勝ももたない。ある程度の関係性は想定できるが、比較対象の図像の種類が異なる可能性も含まれるため、ここでは参考に留めておく。
- (17) 「雒家作」鏡に用例がみえる珍しい語句だが、出土例が少なく参考に留めておきたい（集釋 748A）。
- (18) ただし、上野が A2 と A3 の両型式に地域差を求めたのに対して、岡村は本来第 3 句に来るべきはずの「周刻無祉」が上野分類 A2/S2 では第 6 句目に入り込んでいることは錯簡であると指摘し、特徴句についても「衆華主陽」は「衆神見容」の置換であるとして、四川と徐州の直接的な関係を強調する〔岡村 2011〕。
- (19) 集釋を参照すると 733～736 は江南系、740 に徐州系（ホケノ山古墳）、742B に九子（今照 121）の銘文が紹介されている。
- (20) 徐州市個人旧蔵鏡は画紋帯同向式神獸鏡で上段に伯牙弹琴の図像が入っているために「配像萬疆」の次に「伯牙鼓琴」などの語句が挿入されているのだろう。袁氏の検討でみた伯牙鼓瑟画像鏡と類似する内容をもつことから、劉氏は早い段階で神獸鏡を製作していた可能性もあるが、本鏡では袁氏作伯牙鼓瑟鏡でみえた「箕子」の伝承について既に混乱がみられ、錯簡も起きるなど後出する要素ももっている（集釋 734B）。

附表1 「袁氏作」画像鏡銘文一覧

出土地など	画像構成	銘文	(東王公西王母)	(青龍白虎)	(仙人子喬誦子)	
奈良黒石山古墳	二神二獸	袁氏作竟世少有	・・・王母	仙人子喬赤誦子	辟邪□□左□	長保二親・・・
群馬三本木古墳	二神二獸	袁氏作竟真大好	上有東王公□□□	□人子喬赤誦子	長保二親	辟邪不詳
小校袁氏2 (陳介祺 121 ほか)	二神薰盧	袁氏作竟世少有	東王公西王母	辟去不羊□孫子	白虎山人居左右	長保二親
小校袁氏鏡 3	二神薰盧	袁氏作竟真大巧	上有東王公西王母	仙人子喬赤誦子	白虎薰盧左右	為吏高升買萬
安徽五河金岡 5 号墓	二神薰盧	袁氏作竟真大巧	上有東王父・・・	(以下擬銘)		千秋萬歲生長
セントルイス美術館藏	二神薰盧	袁氏作竟真大巧	上有東王公西王母	仙俠侍		長保二親
安徽博物院藏 75	三神一獸	袁氏作竟真大巧	上有仙人不知老	東王西王・・・	辟邪喜怒無央咎	亘子孫
弥生博物館藏 A12	二神二獸	袁氏作竟真大巧	上有東王父西王母	人有二仙侍左右	仙人子喬赤誦子	士至萬石
北京故宫博物院藏	二神二獸	袁氏作竟真大巧	上有東王父西王母	辟邪在左白虎居右	倉龍白虎居左右	長保二親生長久
藤井康行氏藏	一仙四獸	袁氏作竟真大巧	上有	青龍在左白虎居右	辟除凶央咎	仙人侍久兮
三槐堂 106	二神二獸	袁氏作竟真大巧	上有東王公西王母	青龍在左白虎居右	仙人子喬赤誦子	位至三公買萬倍
徐俊傑氏藏 (宜興 131)	二神二獸	袁氏作竟真大巧	東王父西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤誦子	生長久樂無已
中国歴史博物館旧藏 (楊 1993-119)	二神二獸	袁氏作竟真大巧	東王公西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤誦子	千秋萬歲不知老
湖北荆門 (孔 1992-443)	二神二獸	袁氏作竟真大巧	東王公西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤誦子	千秋萬歲不知老
林裕己氏藏 X020	二神二獸	袁氏作竟真大巧	東王公西王母	山人子喬赤誦子	辟邪在左白虎居右	渴飲玉涼飢食棗
泉屋博古館藏 M189	一仙四獸	袁氏作竟真大巧		青龍在左白虎居右	上有山人不知老	千秋萬年
ダビッド・ワイル氏藏 (精華 93)	四獸	袁氏作竟真大巧	東王公西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤誦子	渴飲王涼飢食棗
安徽五河金岡 6 号墓	一仙四獸	袁氏作竟真大巧		青龍□虎□□居右	上有仙人不知老	千生長久
伝楽浪 (北村忠次氏藏)	搗葉三獸	袁氏作竟真大巧	上有東王西王母		生長	千秋萬年兮
山東雞城峰山鎮照山莊	搗葉三獸	袁氏作竟真大巧	上有東王公西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤誦子	辟去不詳
山東濟南女郎山 284 号墓	搗葉三獸	袁氏作竟真大・・・			・・・老	渴飲玉涼・・・
陳介祺 125	四獸	袁氏作竟真大巧	東王公西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤誦子	千秋萬倍
徐州博物館藏 125	四獸	袁氏作竟真大巧	東王父西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤	
劉軍氏藏 (清愛堂 116)	四獸	袁氏作竟真大巧		青龍在左白虎居右	山人王喬赤容	
五島美術館藏	四獸	袁氏作竟大巧		三龍在左白虎居右	山人子	至三三□
小校蒙氏	四獸	袁氏作竟真大巧	東王公西王母	青龍在左白虎居右	山人子喬赤容	

付表2 「銚氏作」等画像鏡銘文一覽

出土地など	圖像構成	銘文	(東王公西王母)	(青龍白虎)	(仙人子喬誦子)	
徐州博物館	二神薰爐	銚氏作竟真大巧	東王公西王母	人有仙人□□	辟邪喜怒無央咎	千秋萬歲生
業照寺 26	二神二獸	銚氏作竟真大巧	東王公西王母	辟邪喜怒無央咎	人有二仙在左右	千秋萬歲生長久
南京博物院藏	二神二重	銚氏作竟真大巧	上有仙人不知老	渴飲王涼飢食棗	浮游天下歎四海	壽□石長相保 □至三公
山東龍莊博物館藏	二神二獸	(銚)氏作竟真大巧	上有東王公西王母		仙人子喬赤誦子	千秋萬歲生長久
磐田渡邊 CL38	一仙四獸	銚氏作真大巧	上有辟除右白虎	服兮竟老不央□長		
京都大学人文研蔵	一仙五獸	銚氏作竟世少有	仙馬白鹿			
清愛堂 117	一仙四獸	銚氏作竟真大□	上有仙人不知老	白虎在左辟邪居右	白鹿怒走萬里千兮	
陳介祺 126	四獸	至氏作竟真大巧		上有山人子喬赤誦子	居居辟邪左有	青龍喜怒無央咎 千秋萬歲青長久
澁秋館 67	四獸	至氏作竟真大巧	白虎在左辟邪居右	神鹿喜怒無央		
鄂鋼 630 工地	四獸	至氏作竟真大工	統・・・	…□壽	富貴益昌	功成事見 其師命長兮
五島美術館藏	搗藥三獸	田氏作竟真大巧	青龍在左白虎居右	王僑赤誦撞藥草	千秋萬歲生長久	
清愛堂 120	二神二獸	田氏作竟真大巧			上有山人不知老	渴飲玉泉飢食兮
福岡潜塚古墳	搗藥三獸	(田)氏作竟真大巧	・・・	・・・在左□虎□□	□邪喜怒無央咎	山人子喬赤□子 千秋萬歲□□
漢雅堂 96	二神二獸	田氏作竟真大巧	上有東王公西王母	辟邪在左白虎居右	仙人子喬赤誦子	渴飲王泉飢食棗 生長久兮
弥生博物館藏 A11	二神二獸	田氏作竟真大巧	上有東王公西王母	辟邪在左白虎居右	仙人子喬赤誦子	渴飲王泉飢食棗 生長久兮
兵庫西求女塚古墳	二神二獸	田氏作明竟□□□有	服者男為公卿	女為諸王	曾年益壽	子孫番昌 千秋萬歲不知老 長亘賈市兮
静岡堂山古墳	搗藥三獸	田氏作竟真大工			上有仙人不知老	渴飲玉泉飢食棗 千秋萬歲
レオン&ロジャー氏蔵	二神薰爐	劉氏作竟世少有	東王父西王母		仙人子喬赤誦子	為吏高遷賈萬貫 亘孫子
小校劉氏 2	搗藥四獸	劉氏作竟真大巧			王僑赤誦撞藥草	倉龍在左虎居右 千秋萬世生久
漢雅堂 95	二神二獸	劉氏作竟真大工	東王父西王	辟□□□□央□	長亘孫子	
山東沂水柴山鄉南黃冢莊村	二神二獸	(劉)氏作竟真大巧	東王公西王母	青龍白虎		
清愛堂 121	二神薰爐	劉氏作竟世少有	東王父西王母		仙人子喬赤誦子	為吏高亘孫子

付表3 「劉氏作」画像鏡銘文一覽

出土地など	鏡式	銘文
山口竹島	二神一車馬二獸画像鏡	劉氏作竟 明如日月佳且好 上有東王□□
皖江 154	二神二獸画像鏡	劉氏作竟佳且好 明而日月世少有 上有仙□□
大阪大谷大学蔵 97-KG-A19	二神一車馬二獸画像鏡	劉氏作竟大母相 明如日月佳且好 上有東王父西王母
五島美術館蔵	二神一仙一獸画像鏡	劉氏作竟 明如日月世少有 山人不知老 大吉昌利
盛世収蔵※	二神二獸画像鏡	劉氏作竟佳且好 明如日月世少有 東王父西王母 □人生如山石
伝河南鄭州 (陝西師範大学蔵)	二神二獸画像鏡	劉氏作竟真大□ 上有東王父西王母 令人亘子孫兮
鳥根寺末遺跡	二神二獸画像鏡	劉氏鏡□イ奇 □□無傷 □□知老 呆二親得点□
銅華清明 119	二神二獸画像鏡	劉氏作竟真大巧 上有東王父西王母 亘子孫師命長
小校劉氏 3	二神二獸画像鏡	劉氏作竟真大巧 上有山人不知老
久保惣 52	二神二獸画像鏡	劉氏作竟真大巧 上有山人不知老 渴飲玉泉
中国歴史博物館旧蔵 (楊桂榮 1993-122)	四獸画像鏡	劉氏作竟真大工 上有山人不知老兮
青州市博物館蔵 10	四獸画像鏡	劉氏作竟真大工 上有山人不知老
五島美術館蔵	二神二獸画像鏡	劉氏作竟真大巧 上有天守四首 轉□連 相隨千歲暇臺立
ケルン東洋美術館蔵 (精華 95 上)	四獸画像鏡	劉氏竟與衆異 大吉利亘侯王 買能常服者 子孫番昌 師命長
奈良天神山古墳	二神二獸画像鏡	劉氏作明鏡 自有善同出丹陽 □師得同 合煉五金 服者 敬奉臣良 吉利

付表4 「劉氏作」神獸鏡・関連鏡銘文一覽

出土地など	鏡式	銘文	配像萬疆	伯牙琴	鍾子聽其	期子噲	天禽四首	衛持維剛	邊太乙	乘雲駕龍	遷從群神	五帝三皇	誅討鬼凶	吉利
徐州市個人蔵	面紋帶同向式神獸鏡	劉氏作鏡	配像萬疆	伯牙琴	鍾子聽其	期子噲	天禽四首	衛持維剛	邊太乙	乘雲駕龍	遷從群神	五帝三皇	誅討鬼凶	吉利
久保惣 59	銘紋帶二神二獸鏡	劉氏作明鏡	配像萬疆	天禽四守	衛持維剛	大吉	其師命長	服者	敬奉賢良	會年益寿	富貴	※漢有善同出丹陽 大師得同 合煉五金成		
陳介祺 163	面紋帶環狀乳神獸鏡	劉氏作明鏡	配 . . .	番昌分	※善同出丹□									
福岡祇園山 1 号薺梧	銘紋帶四獸鏡	吾作明□	配□萬 . . .	周□無□	周□無□	大吉	其師命長	服者	敬奉賢良	. . .	山人王喬	赤雨子兮	※善同出丹陽 大師得同 合煉五金	
陳介祺 160	銘紋帶四神鏡	吾作明鏡	配像萬疆	天禽四首	衛持維剛	大吉	其師命長	服者	敬奉賢良	. . .	山人王喬	赤雨子兮	※善同出丹陽 大師得同 合煉五金	
奈良栴野里 19 号墳	面紋帶四神鏡	吾作明鏡	配像萬疆	天禽四守	衛持維剛	其師大吉	服者命長	敬奉賢良	會年益寿	富貴昇始	寿如東王父	西王母	子孫番昌	

参考文献

- 岩本 崇 2003 「風巻神山 4 号墳出土鏡をめぐる諸問題」清水町教育委員会『風巻神山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書VI、清水町教育委員会
- 岩本 崇 2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 上野祥史 2000 「神獣鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第 83 卷第 4 号
- 上野祥史 2001 「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第 86 卷第 2 号
- 上野祥史 2006 「画像鏡の模倣について—図像分析の立場から—」『原始絵画の研究』論考編、六一書房
- 上野祥史 2007 「3 世紀の神獣鏡生産—画文帯神獣鏡と銘文帯神獣鏡」『中国考古学』第 7 号
- 岡村秀典 1992 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録』出雲考古学研究会
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66、吉川弘文館
- 岡村秀典 2005 「三角縁神獣鏡の成立—徐州鏡との関係を中心に—」山口県立萩美術館・浦上記念館編『鏡の中の宇宙』シリーズ山東文物⑥、山口県立萩美術館・浦上記念館
- 岡村秀典 2011 「後漢鏡銘の研究」『東方学報』京都第 86 冊
- 岡村秀典 2012 「後漢鏡における淮派と呉派」『東方学報』京都第 87 冊
- 岡村秀典 2015 「後漢鏡の作家たち」『古鏡 その神秘の力』六一書房
- 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波新書
- 岡村秀典 2023 「画紋帯神獣鏡の東伝—型式と鉛同位体比からみた九子派の動態—」『東方学報』京都第 97 冊
- 岸本直文 1989 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』第 72 卷第 5 号
- 車崎正彦 2005 「袁氏作銘帯同向式二神二獣鏡」『古代』第 118 号
- 実盛良彦 2015 「上方作系浮彫式獣帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』VOL.7
- 下垣仁志 2008 「溝柁神社蔵籙氏作神人龍虎画像鏡」茨木市史編さん室『將軍山古墳群Ⅱ—考古学資料調査報告集 2—』、新修 茨木市史 史料集 12、茨木市
- 田中 琢 1983 「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」『奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会
- 「中国古鏡の研究」班 2011a 「後漢鏡銘集釋」『東方学報』京都第 86 冊
- 「中国古鏡の研究」班 2011b 「三国西晋鏡銘集釋」『東方学報』京都第 86 冊
- 「中国古鏡の研究」班 2012 「漢三国西晋紀年鏡銘集釋」『東方学報』京都第 87 冊
- 「中国古鏡の研究」班 2013 「漢三国鏡銘集釋補遺」『東方学報』京都第 88 冊
- 林 裕己 2006 「漢鏡銘について（漢鏡銘分類概論）—樋口分類補正試論—」『古文化談叢』第 55 集、九州古文化研究会
- 樋口隆康 1953 「中国古鏡銘の類別的研究」『東方學』第 7 輯
- 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
- 馬淵一輝 2015 「斜縁同向式神獣鏡の系譜」『森浩—先生に学ぶ—森浩—先生追悼論集—』同志社大学考古学シリーズXI
- 馬淵一輝 2019a 「鳥居前古墳出土鏡片の評価」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 54 集
- 馬淵一輝 2019b 「華北東部の銅鏡をめぐる諸問題」『銅鏡から読み解く 2～4 世紀の東アジア 三角縁神獣鏡と関連鏡群の諸問題』アジア遊学 237、勉誠出版
- 馬淵一輝 2022 「斜縁神獣鏡の系譜—考古学的手法と字形分析を中心に—」『古文化研究』第 21 号
- 馬淵一輝 2023 「上方工房の生産活動」『古文化研究』第 22 号

- 村瀬 陸 2016a 「菱雲文に着目した同型神獸鏡の創出」『古文化談叢』第 77 号
- 村瀬 陸 2016b 「漢末三国期における画文帯神獸鏡生産の再編成」『ヒストリア』第 259 号
- 村松洋介 2004 「斜縁神獸鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号
- 森下章司 2007 「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第 54 巻第 2 号
- 森下章司 2011 「漢三国西晋鏡の展開」『東方学報』京都第 86 冊
- 森下章司 2012 「華西系鏡群と五斗米道」『東方学報』京都第 87 冊
- 森下章司 2014 「後漢鏡製作工房の一形態」大阪大谷大学博物館『古墳出土品がうつし出す工房の風景—手工業生産の実像に迫る—』大阪大谷大学博物館報告書第 61 冊、大阪大谷大学博物館

遺跡・図録等文献

- 安徽省文物考古研究所・五河县文物管理所 2004 「五河县金崗古墓群清理簡報」『東南文化』第 4 期
- 梅原末治・藤田亮策 1959 『朝鮮古文化綜鑑』第 3 巻、養徳社
- 岡林孝作・水野敏典編 2008 『ホケノ山古墳の研究』橿原考古学研究所研究成果第 10 冊
- 大谷女子大学資料館編 1989 『収蔵品図録 V』
- 大牟田市教育委員会 1976 『潜塚古墳 大牟田市黄金町 1 丁目所在の古式古墳の調査』
- 孔 祥星 1992 『中国銅鏡図典』文物出版社
- 孔 繁剛 1991 「山東沂水県徴集の古代銅鏡」『文物』第 7 期
- 後藤守一 1942 『秦鏡と漢六朝鏡』大塚工芸社
- 済南市考古研究院編 2021 『済南鏡鑑』文物出版社
- 周 能 1992 「湖南常德東呉墓」『考古』第 7 期
- 石敬東・蘇昭秀 2001 「山東棗荘市博物館収蔵の戦国漢代銅鏡」『考古』第 7 期
- 関野貞ほか編 1925 『樂浪郡時代ノ遺蹟』朝鮮総督府
- 西原崇治 2002 『高部古墳群 I—前期古墳の調査—』千束台遺跡発掘調査報告書 IV、木更津市教育委員会
- 原田三郎編 1995 『遠江堂山古墳』磐田市教育委員会
- 福岡県教育委員会 1979 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告』X X VII
- 宮内庁書陵部陵墓課編 2005 『古鏡集成』学生社
- 水野敏典 2010 『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』科学研究費補助金(基盤研究 A)研究成果報告書 平成 18 年度 - 平成 21 年度、奈良県立橿原考古学研究所
- 持田大輔編 2008 『服部コレクション 鏡の世界』早稲田大学會津八一記念博物館
- 安田滋編 2004 『西求女塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 山口県立萩美術館・浦上記念館編 2005 『鏡の中の宇宙』シリーズ山東文物⑥、山口県立萩美術館・浦上記念館
- 楊 桂榮 1993 「館蔵銅鏡選輯(三)」『中国歴史博物館館刊』総 20 期
- Dewar, Susan ed. 1994 *Bronze Mirrors from Ancient China, Donald H. Graham Jr. Collection, Hong Kong*
- Hansford, S. Howard 1957 *The Seligman Collection of Oriental Art, Vol. I, The Arts of Council of Great Britain*
- J. Edward Kidder Jr. 1956 *Early Chinese bronzes in the City Art Museum of St. Louis*
- Leon Anlen & Roger Padiou 1989 *Les miroirs de bronze anciens: symbolisme & tradition, Paris*

出典略号

- 鄂州・・・鄂州市博物館 2002『鄂州銅鏡』中国文学出版社
- 鄂城・・・湖北省博物館・鄂州市博物館編 1986『鄂城漢三国六朝銅鏡』文物出版社
- 漢雅堂・・・黄洪彬 2013『漢雅堂藏鏡』上海辞書出版社
- 巖窟・・・梁上椿 1940～1941『巖窟藏鏡』
- 宜興・・・宜興市文物管理委員會弁公室編 2013『瑩質神工光耀陽羨—宜興民間收藏銅鏡精品集』文物出版社
- 紀年鏡図説・・・梅原末治 1943『漢三国六朝紀年鏡図説』桑名文星堂
- 今照・・・浙江省博物館編 2001『古鏡今照—中国銅鏡研究会成員藏鏡精粹』文物出版社
- 久保惣・・・中野徹 1985『和泉市久保惣記念美術館 藏鏡図録』和泉市久保惣記念美術館
- 古鏡・・・羅振玉 1916『古鏡図録』
- 三槐堂・・・王鋼懷 2004『三槐堂藏鏡』文物出版社
- 紹興・・・梅原末治 1939『紹興古鏡聚英』桑名文星堂
- 小校・・・劉體智 1935『小校經閣金文拓本』
- 徐州・・・徐州博物館編 2022『徐州博物館藏銅鏡』科学出版社
- 清愛堂・・・劉軍 2014『銅華清明光照千秋—清愛堂藏鏡』文物出版社
- 精華・・・梅原末治 1933『欧米蒐儲支那古銅精華』銅鏡部、山中商会
- 泉屋・・・廣川守 2004『泉屋博古』鏡鑑編、泉屋博古館
- 千鏡堂・・・陳鳳九 2007『丹陽銅鏡青瓷博物館 千鏡堂』文物出版社
- 激秋館・・・陳宝琛 1930『激秋館古金図』北京商務印書分館
- 陳介祺・・・辛冠潔 2000『陳介祺藏鏡』文物出版社
- 葉照寺・・・今井育雄・今井佐江子 1988『中国の古鏡—収集と研究の手引きを兼ねて—』葉照寺收藏品図録（一）、葉照寺

図版出典

- 図1 筆者作成
- 図2 鈕座・連珠紋、乳座・連珠紋：宮内庁書陵部陵墓課編 2005・36 鈕座・圈帯、乳座・無し、外区・波鋸紋：山口県立萩美術館・浦上記念館編 2005・56 乳座・連弧紋：筆者撮影 外区・C字唐草紋：ColBase 外区・鋸波鋸紋：廣川守 2004・M189
- 図3 1：劉體智 1935・袁氏3鏡 2：楊桂榮 1993・119 3：辛冠潔 2000・125 4：安徽省文物考古研究所・五河縣文物管理所 2004
- 図4 筆者作成
- 図5 1：今井育雄・今井佐江子 1988・26 2：辛冠潔 2000・126 3：ColBase 4：Leon Anlen&Roger Padiou 1989・252頁
- 図6 1：陳鳳九 2007・163 2：筆者撮影
- 図7 1：浙江省博物館編 2001・141 2：関野貞ほか編 1925・1321
- 図8 1：梁上椿 1940・2下55 2：大谷女子大学資料館編 1989・2頁
- 図9 1：中野徹 1985・59 2：水野敏典 2010・149頁

図 10 1：羅振玉 1916・100 2：Dewar,Susan ed. 1994・55 3：辛冠潔 2000・160

図 11 1：梁上椿 1940・2上 101 2：東洋文庫梅原考古資料 102-0079-177

図 12 1：森下章司 2012 2～5：筆者撮影

表 筆者作成

謝辞

本稿は 2016 年に京都大学に提出した修士論文を大幅に改稿したものである。諸般の事情のため修正して発表することは遅れたが、この論文は多くの方々との議論や助言がなければ、かたちになることはなかった。一人一人名前を挙げることはできないが、関係者の方々には感謝申し上げます。

なお、資料調査では下記の機関のお世話になった。末筆ながら記して感謝申し上げます。

和泉市久保惣記念美術館 磐田市教育委員会 大牟田市立三池カルタ・歴史資料館 泉屋博古館

横浜ユーラシア文化館 早稲田大学會津八一記念博物館 早稲田大学考古学研究室

本稿は平成 28～31 年度日本学術振興会特別研究員奨励費「後漢後期における銅鏡の製作系統と流通に関する研究」(課題番号 16J09093)、平成 27 年度高梨奨学基金若手研究助成「日本出土の後漢後期鏡とその製作系統—徐州系鏡群を中心に—」の成果の一部である。